

小学校【国語科】「主体的・対話的で深い学び」の手引き

飛驒教育事務所

1 国語科における「主体的・対話的で深い学び」のとりえ

- 「主体的な学び」・・・ 児童が見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる学び
- 「対話的な学び」・・・ 児童同士や教師、地域の人や本の作者などとの対話が図られるような言語活動を行い自己の考え方を広げ深める学び
- 「深い学び」・・・ 国語で表現し理解することを通じて、言葉の働きを捉えるとともに、自分の思いや考えを形成し深める学び

言葉による見方・考え方

児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること。

2 「主体的・対話的で深い学び」の例

つかむ	・前時までに学習したことを確認したり単元を貫く課題を確認したりする。 本時の課題を確認する。	【主体的な学び】 ・自ら本時の学びに興味や関心をもたせ、見通しを立てさせる。 ・児童自身が知識や技能を振り返ることで、身に付けなければならないものをつかませる。 ・「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」 サンプル検討やモデル検討から「見方・考え方とのずれ」を生み出し、自分の課題や学習状況を判断させる。 ・「C読むこと」 心情描写や構成・展開を読むための視点を示すことで、課題解決のための見通しをつかませる。
深める	一人学び ・課題を追究する。 全体交流等 ・友達と交流し、言葉による見方・考え方を深め、広げていく。 ・教師による深めの発問や仲間からの新たな視点の提示で追究する。	【主体的な学び】 ・児童自ら課題解決に向けて、新たな考え方や方法を生み出させていく。 ・児童自ら試行錯誤しながらよりよい表現を見つけたり、分析・評価し論述したりさせる。 【対話的な学び】 ・必要に応じてペアやグループ、一斉、スクランブルといった様々な形態で追究することで、仲間の学びのよさや新しい考えが発見できるようにする。 ・黒板やホワイトボードを使って児童が説明したり付箋等を使用したりして、考えを広げたり深めたりする場を設定する。 ・言葉で表現する際の正誤・適否・美醜といった言語感覚を養うために、相手や目的、場面や状況について判断できるように話し合いをさせる。 【深い学び】 ・教師の働きかけ（深めの発問）や仲間からの新しい視点の投入によってゆさぶり、今までにない考えを形成する。 ・何度も練習したり問題を解いたりして使えるようにすることで、知識・技能を定着させる。 ・言葉の働きを捉えるために役割演技や動作化などをさせ、言葉への自覚を高める。
まとめる	・本時の中でできたこと、分かったことや自己の変容を振り返る。 ・次時の見通しをもつ。	児童が自分自身で自己の変容を実感するとともに、活動内容だけにとどまらず、誰のどんな言葉で深まったのかという視点でも振り返らせる。 【深い学び】 ・「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」 提示した観点で追究できたかを確認し、比較できるものがあれば比較することで自己の変容を自覚させる。 ・「C読むこと」 課題に即して読み深まったか、初めの読みと仲間と追究した後の読みとの変容はあるかを確認する。 【主体的な学び】 ・次時への追究意欲や、本時学んだことを振り返り、自身の学びを自覚できる場面を設定する。

